



あてのない旅の途中。
昼寝から目覚めると
そこには一人の少女が立っていた。

「旅の方ですか？」

「あ、ああ…」

「そうですか。フフ」

（地元の娘かな…？
何が可笑しいのだろう？
…それにしても、
なんてイイ体しているんだ。
しかも、ブラをつけていない…！？
…ゴクリ。）

「私の体に興味ありますか？」



「え…?」

「長旅の疲れ、癒してあげますよ?」

(な、何を言ってるんだ? この娘は。
あ、パンツが濡れてる…。)



「な、何するんだ、君！？
こんなところ
誰かに見られたらマズいよ！」

「そんなこと言ってお兄さんのココ、
こんなに固くなってますよ？」

「うっ、ああ…。」

「それにここは、見での通り
人気のない田舎町なので、ご安心を。
ウフフ。」



「そ、そういう問題じゃ…うっ」

「ほら、気持ちいいですか？」

(なんて手つきなんだ…！
細い指がチンポに絡みつくように扱かれる！)

「フフッ、すごいビクビクしてます。
いっぱい出しているんですよ？」

「くっ…！
だ、駄目だ…！
それ以上されたらもう…！」



「で、出る……」

「わあっ、
濃いのがいっぱい出ましたあ。
すごく美味しそう。ウフフ」

（一体何なんだこの娘……!?
初対面の男にこんなことして……!）

ド
ビ
ュ
ッ

色々な考えが頭の中を交錯した。
だが俺はもう、己の欲望に
従うしかなかったのだった。



「こんなの…
ガマン出来るわけ無い…!」

「我慢する必要なんてあります？
フフッ。
あっ…お兄さんの
太くて固いのが入ってきます…♡」

ズカッ

ヌルッ…

(うあっ、スゴイ…。
俺のモノが
どんどん飲み込まれていく…!)

「あっ、ああ！
奥まで入って…ん、ああっ！」

「くぅっ…、イイ締め具合。
アソコも凄い濡れてるぞ。
君は、本当にいやらしい娘だな！」

「あっああん！
そこっ…もっと、もっとお！」

「ほらっ、ここがイイのか！？
ほら、ほらあ！」

ズッ

ズッ

「あんっあんっああん！
私、もうイきそう…！！
お願い、このまま中に出してえ！」

「え？　そ、それは…
うっ…！！　だ、駄目だ！
出る！」

「あっあああああああああ！
熱いのが、奥につ…
いっぱい出てます…！」

フ
ビ
ッ

（気持ち良すぎて
思わず中に出してしまった…。
……ええい、毒食らわば皿までよ！）

フ
ビ
ッ

ビ
ッ

突然の雨。
無人の駅舎に逃れた俺たちは、
濡れた体も気にせず行為を続けた。

(出会ったばかりの少女とする背徳感……！
この娘のアソコの具合の良さ……！
もうっ、腰がつ……止まらない！)

「あん！ あん！
すごいっ……
さっきよりも……はっ、げ……しい！
あっあっ、ああん！」

ズポッ

ズザッ



「はあっはあ、すごいで。
君のアソコ、グシヨグシヨだ。
雨に濡れた体よりもっと濡れてる」

「だって…、あなたが…
気持ち良くしてくれるから…!!
あっああん!」

「よし、じゃあもっと
気持ち良くしてやる!
ほらっ、どうだ!?!」

「あん! あん! あん!
駄目ええええええ!
イクうつ、イっちゃうよおおおお!」

ズ
ザッ

ズ
ポッ

「くっ…俺も、もういきそうだ！
このまま中で出すぞ！」

「熱いのがっ…いっぱいっ…
入ってきます！
あっ…あああああああああ！」



「あっあんっああん！
だっ、駄目ええええええ！
そんなにつ…激しく、突いたら…
駄目ええええええええええええ！」

「はあっはあ！
こいつがっ…欲しくてっ…
俺をっ…誘ったんだろう！？
ほらっ、もっと…！ たっぷり…！
味わええええええ！」

ズ
ザ
ズ



「はあっ…、すごいっ…！
もうっ…蕩けてっ…！…しまい…そう、です…！」

「お、俺も…もうイきそうだ…！
よしっ、中にたっぷり出してやる！」

ズ
ダ
ズ



「ああああああああああああ！
だ、駄目ええええええええええ！」



「すごいぞ……！
君のアソコ、まだビショビショだ！」

「だって、私まだ満足できないから……
お願い……！ もっと欲しいの！
あなたの精液、いっぱい出して……！」

「よしっ、じゃあ……これで最後だぞ！
俺の全部、膣で受け取れよ！」



「あああああああああああああ！
いっぱい…いっぱい出てるよおおおおお！
頭、真っ白になっちゃううううううううううう！」

ビクンッ

オ
チ
ダ
バ

ビク
ビクッ





「はあっはあ…
すごく、気持ち良かった」

「うん、私も…!!
もう、あなたのカラダから
離れられない…!!」

「ああ…。そうだな、もうしばらく
この街にいてみても、いいかもな…!!」

































